

く止まった刻 検証・大川小事故>第2部 激震(6完) ざわつく校庭「帰れるの」

マグニチュード(M) 9.0の国内観測史上最大を記録した東日本大震災。巨大津波が河口から約3.7キロ離れた石巻市大川小を襲うまで約50分あった。児童74人と教職員10人の命が失われるまで何があったのか。第2部は当時の児童や保護者らの証言を基に、3月11日午後2時46分の地震発生から3時10分ごろまでの初期対応を検証する。(大川小事故取材班)



児童や教職員が校庭で待機を続けた大川小。北上川からの冷気が校舎を包む

◎14:46~15:10

「石巻市鮎川で午後2時52分、50センチの津波が観測されました」

大地震の発生から16分たった3月11日午後3時2分、NHKのラジオが宮城県内で観測された最初の津波情報を放送した。「津波は繰り返し押し寄せる恐れがある」と警戒を促す。

同市大川小の校庭に避難した児童の列は、保護者への引き渡しが進むにつれて崩れ始めた。当時1年の女子児童は、端だった列が途中から真ん中に移ったことを覚えている。

担任の女性教諭=当時(24)=は防寒着を校舎に置いてきたのか寒そうにしていた。「2年生になっても先生がいい」。1年生が慕っていた若手教諭だ。

6年の女子児童を引き取りに来た保護者は、学校に向かう車中で「6メートル」の津波予想を伝えるFM放送を聴き、鼓動が高鳴った。

「早く山に逃げて」。校庭にいた6年担任の男性教諭=当時(37)=に駆け寄り、腕をつかんで右手で裏山を指した。教諭は冷静な様子で「落ち着いてください」と答えたという。

「現在、宮城県沿岸に大津波警報が発令中です。海岸付近や河川の堤防などには絶対近づかないでください。繰り返します…」

午後3時10分、校庭の防災行政無線が2度目の大津波情報を流した。津波襲来前、大川小に流れた最後の無線だ。内容は1度目とほぼ同じ。ただ、サイレンは鳴っていない。

「ここは海岸沿いになるの?」。当時4年の武山詩織さん(16)=高校2年=は無線を聴き、友達に尋ねた。せり出した山に阻まれ、学校から約3.7キロ先の海は見えない。次々に迎えに来る保護者の姿を横目に「お母さん、きょう仕事休みだったかな」と不安を募らせた。

「じゃあ俺、先帰っから。またねー」。1人、また1人と帰途に就く。そうした中、6年の男子児童が担任と言い合い、「いいから座ってろ」と注意された。

様子を見ていた当時5年の男性(18)は「6年の活発な子だから『またか』と思った」と話す。別の児童は「男子が『俺たち大丈夫なんですか』と(誰かに)言っていた」と証言した。

「津波、やばいんじゃないの」「高い所に行った方がいいんじゃないか」。津波への危機感を募らせる6年の男子児童の会話を覚えている同級生もいる。

一方、6年の女子児童は校庭で泣いていた。普段は人前で涙を見せず、驚いた友達が慰める。少し前に見た悪夢を思い出していたという。

「教室でわいわいしている時に地震が起きて、黒い渦みたいなのにみんなのみ込まれる夢を見た。本当にそんなふうになるのではないかと思って泣いた」。震災直後の取材にこう語っている。

この頃、海沿いの地区から猛スピードで走ってくる車が目撃されている。余震の度に地鳴りがして、校舎は音を立てて揺れた。

教職員は住民を交えて話し合っているが、今後の対応は決まらない。

「帰れるかな」。男子児童の一人がつぶやいた。

「ただいま」と言える日常は、当たり前にと信じていた。